

「ヤコブ-祝福をつかむ者(1)-」(要旨)

聖書箇所：創世記27章1-29節

【1】 それぞれの思惑

イサクは老齢になり自らの死を予期したのでしょうか(創世記27:2)。長男のエサウを祝福し家督を継がせることを考えました。しかしエサウは、アブラハムやイサクのように神への信仰を継承しませんでした。

エサウはアブラハムの遺言(創世記24:2-3)に心を留めることなく、ヒッタイト人から二人の妻を娶りました(創世記26:34-35)。また弟ヤコブに一杯の食物と引き替えに長子の権利を売ってしまうような人物でした(ゲル12:16)。ところが父イサクは、長男のエサウを祝福することに拘りました。エサウも過去に自分が「長子の権利を売った」事実を無きものとして祝福を受けるため野に出かけていきました。

リベカは夫イサクと長男エサウのやりとりを耳にしました。これまで「二つの国があなたの胎内にあり…兄が弟に仕える」(創世記25:23)という神の約束がどのように実現するのか待ち望んでいたのでしょうか。しかし夫がエサウを祝福しようとしている。彼女は時を置かず、自ら約束を実現するため愛息子である次男ヤコブと結託しました(創世記27:5-10)。

ヤコブは母の提案に戸惑い無謀と考えました。しかしいざ父を前にすると、「あなたの神、主が私のために…」(創世記27:20)と言い、長男のエサウとして祝福を受けようとした(創世記27:19,24)

【2】 リベカが向き合った相手

リベカの置かれた状況に自らを重ねるならば、彼女のとった行動に共感できるのではないのでしょうか。自分の周りにはいる人々が友好的でないと察知すれば、自分の立場を守るための行動が必要と感じるでしょう。状況が望ましくない方向に向かえば、何とかそれを食い止めたいと考えるでしょう。当然です。

戸惑った彼女は誰と向き合っていたのでしょうか。彼女が向き合っていたのは、イサクでありエサウでした。彼女は、主の約束の時を待ち続けていたら機会を逸してしまうと焦ったのでしょうか。リベカとヤコブは、祝福を自らの手でつかみ取ろうとしたのです。

【3】 主に委ねるということ

箴言にはこう書かれています。

「人は心に計画を持つ。しかし、舌への答えは主から来る。人には自分の行いがみな純粹に見える。しかし、主は人の霊の値打ちを量られる。あなたのわざを主にゆだねよ。そうすれば、あなたの計画は堅く立つ。」(箴言16:1-3)

箴言16章は1-9節を一つのまとまりとして読むことができます。その特徴は8節を除き各節に「主」ということばが出てくることです。人の思い、計画、そして行動を超えて、全てを支配しておられる「主」がいて教えています。

創世記27章は神不在の人間のやりとりが展開しているように見えます。それでいながら、イサクとエサウ、そしてリベカとヤコブの計画を超え、創世記25:23の約束が実現に向かっていくのです！

▷私たちは「自分」が向き合っている「相手」のことしか見えなくなってしまういませんか？またその一挙一動に心が支配されていませんか？全てを支配しておられる「主」を認め、「主」にゆだね、自分の果たすべき務めと向き合うことができますように。

